**「我々はどうなるべきか～スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの描く理想の将来像に近づくには」**

2019年2月17日

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会（午後の講話）

スワーミー・シャマーナンダによる講話

於・逗子本部別館

**はじめに**

今、スワーミー・メーダサーナンダジーが紹介されたように、私はマーヤーヴァティーに住んでいます。私がマーヤーヴァティーに行ったのは30年前で、その頃に読んだ本の中にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）の思い出を書いた話がありました。それはスワーミージーがある家族の家に住んでいたときの話です。その家には小さな子供がおり、スワーミージーは講話から帰ってくると、その子供と一緒にいろんなことを話しました。話の内容は、未来の人がどのようであるべきか、どのように振る舞うべきか、などでしたが、その少年は小さかったので、話の詳しい内容を覚えていませんでした。それでスワーミージーの回顧録には、彼の印象などを書いただけでした。

それで、私は未来の人々がどのようであるか、どのように振る舞うべきかを考えてみたいと思って、今日はその話をすることにしました。その話をする理由は、私たちが将来どのようになるべきかを知るためです。

**自然の背後にある存在への信仰**

この協会のマザーズ・ハウスは2005年に改築されました。そのオープニング・セレモニーには、インドからデリー・センターの長であるスワーミー・ゴクラーナンダジーが来られました。彼がデリー・センターの長になる前は、インド北東部のメガラヤ州のチェラプンジのセンター長でした。インドのメガラヤ州は現在人口が1400万人で、その約半数をカシの部族が占めています。チェラプンジ・センターは学校を運営していて、そのもとには現在70校あり、総生徒数は1万人になります。

ゴクラーナンダジーがそのセンターにいたとき、カシの子供たちが自己紹介書の宗教欄に「自分は無宗教である」と書いていることを不思議に思いました。それで彼はカシの宗教を調べ、それがヴェーダーンタのシャンカラの教えに非常によく似ていることに気づきました。カシの人たちは、ヴェーダーンタの純粋意識と同じように、神は遍在しており神は全ての中に存在している、と考えています。それで彼らは、神は遍在しているのだから特別に寺を作る必要はない、と考えています。彼らは人に仕えることは、神に仕えることだ、とも考えています。カシの人々は純朴で労働の尊厳を重んじ、また心から人をもてなし、礼儀正しいといわれています。

このように聞いていると、なんだか日本の神道のように感じられます。日本もまた、万物に霊があることを認めているからです。このようなアニミズム的な宗教は世界のいたるところに見られるものです。このことは人々が自然の背後に何か霊や神と呼ばれるものを感じていることを示しています。インドのリグ・ヴェーダではさまざまな神を認め、彼らへの賛歌が書かれています。日本の神道でも、八百万（やおよろず）の神といって、多くの神を認めています。このことは、自然の背後に何らかの存在を認めることが、それほど特別なことではないことを示しています。

私がウッタルカーシーにいたときにある経験をしました。そこでは毎朝、食べ物を得るためにサットラといわれる宗教者のために食物を配るところへ行きます。そこへ行けば宗教のいかんを問わず、チャパティを5枚と、ごはん、ダル、一品の野菜料理（サブジ）がもらえます。ある朝、そこに向かっているときに、ある高校の校庭から生徒たちが歌を歌うのが聞こえました。その歌の意味は、

あなたは実に母であり、あなたは実に父である。

あなたは実に親族であり、あなたは実に友人である。

あなたは知識であり、そしてあなたはこの世の富である。

あなたは全てのものであり、私の神々の神である。

というものです。私はそれを聞いて、なぜ高校でこのような歌を歌っているのかと不思議に思いました。しかしインドでは宗教歌を学校で歌ったり、宗教劇を演じることは普通のことと考えられています。これらの歌は何世紀も前の非常に古い歌なのですが、現在でもまだ新鮮な感じがします。日本の古い歌だと現在では、なにか場違いな感じがして歌うのも困難な感じがしますが、インドの歌はそうではありません。現代でもインドでは多くの歌手たちが宗教歌を歌い、CDの発売をしています。

ウッタルカーシーの話が出たので、もう二つそのときに見たことを話します。一つは、ウッタルカーシーには女性たちのグループがあり、彼女たちはエカーダシの日にお寺に集まって、宗教歌を歌います。次のエカーダシの日にはまた別の寺に集まって、同じように宗教歌を歌います。

もう一つの話は、朝にウッタルカーシーの街を歩いていると、数人の婦人たちに出会うことがあります。彼女たちは手にかごを持ち、神妙な顔をして歩いています。彼女たちはどこへ行くのでしょうか？彼女たちは川へ行き、川の中の適当な石の上に立って、そこでガンジス川を礼拝します。かごの中には線香や花が入っていて、それで礼拝します。そして川の水をコップで汲んでまた川に供えます。

**万物に宿る霊は普遍的で唯一**

さて、話を戻して、この歌の意味について考えてみましょう。もし万物に霊が宿るのなら、当然、人にも宿ることになるのですから、この歌の言っていることは正しい、ということになります。では、その霊とは何なのでしょうか？人はそれぞれ別の霊を持っているのでしょうか？それとも同じ霊を持っているのでしょうか？もしそれぞれの霊が違っていたら、それは多神教のようにさまざまな霊が存在することを意味します。霊とは何かを探求した日本人は、それほどいないかもしれません。日本人は建設や工業、機械などの方面ではたいへん実践的なのですが、霊的方面ではそのようにはみられません。世界の国々のほとんどがそのようなのですから、それが普通なのかもしれません。しかし一つだけ例外の国があります。どこの国でしょうか？それがインドの国です。

インドの国の歴史を見ると、国が始まるよりも宗教の歴史の方がはるか前から始まっていたようにみえます。そしてさらに驚くべきことがあります。彼らは、宗教の方面においてはいかなる聖域をも設けることなく、大胆に自由に追求しています。多くの人々が人生の全てをかけて追求し、それらのうちの少数の人が、霊とは何かを直接体験し悟っているのです。彼らは古い時代にはリシとして知られ、彼らの教えはウパニシャドとして残っています。このインド人の傾向は時代が変わっても変わることなく、近代においてもシュリー・ラーマクリシュナやスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、ラマナ・マハリシといった悟った人たちを生みだしています。ではリシたちは霊についてどのように言っているのでしょうか？

シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャドでは、輝けるものデーヴァが全てのものに入った、といわれています。そしてリシたちによれば、それはさまざまな霊ではなく、同じものが入った、ということです。なぜなら全てのものに入るためには、普遍的でなければならないからです。でなければ、これには入れるが、あれには入れない、ということが起こるからです。それにもし、別々のものが入っていたとするなら、どのようにして考えや言葉や思いを伝えることができるでしょうか？もし私たちが全く別の生き物だとしたら、言葉は通じないことになりますから。したがって、全ての人の中、人だけに限らず、動物や植物の中にも同じ霊、同じ輝けるもの、デーヴァが入っているということになります。

**本性を知るほどに成長する**

次に問題になるのは、もし同じものが入っているなら、なぜそれぞれに違いがあるのか、ということです。人と人との違いは、考えの違いや肉体の違いだけでしかありません。中に入っているものは変化することなく、存在感として純粋意識として感じられるものです。それは活動することもなく、ただそれが存在することによって、心や体が活動するのです。違いは、入れ物である体や心の違いだけです。しかし、人々はそのことについては全く無知で、何も知りません。

無知とは何でしょうか？それは自分の本性を知らないことと、そして自分でないものを自分と思う、ということです。自分でないものを自分であると思う程度によって、人と人との違いが出てきます。自分の本性が何かを知るほど自分は進歩していることになります。

**心と体の制御と神聖な交わりの重要性**

チャンドギヤ・ウパニシャドの中に一つ話があります。それは、阿修羅のリーダーであるヴィローチャナと、神々のリーダーであるインドラがプラジャパティのところに行き、アートマンとは何かを学ぼうとした話です。なぜならアートマンの知識を得れば人は不死となり、全ての欲望がかなうからです。それで彼らはプラジャパティのところへ行き、自分たちはアートマンが何かを学びたい、と言いました。そこでプラジャパティは32年間ブラフマチャーリとして自分のもとで修業しなさい、と言いました。

32年後に彼らはプラジャパティに尋ねました。プラジャパティは、水を張った器に見えるものがアートマンである、と言いました。そしてヴィローチャナは自分の姿を水面に見て、肉体がアートマンである、と思いその考えに満足して帰っていきました。そして他の阿修羅たちにも、肉体がアートマンであり、肉体を強く健康に、そして快適に過ごさせることが人生の目的である、と言って教えました。ギーターの第16章には阿修羅たちの性格や特徴について書いてあります。ですから阿修羅たちについて知りたい方は、ギーターを読んでください。

一方インドラも同じように考えて、帰っていきましたが、途中で肉体がアートマンであると考えることは間違っていると思いました。なぜなら、肉体は、いつかは死ぬからです。アートマンの知識を得れば不滅になるはずなのに、滅びる体である、ということはありえません。それで彼はプラジャパティのところに戻り、そのように言いました。プラジャパティは、それならもう32年間自分のもとで修業してください、と言いました。

32年後、インドラがプラジャパティに尋ねると、プラジャパティは答えました。夢の中で活動しているものがアートマンであると。そしてインドラはその答えに満足して帰っていきましたが、また途中で考えました。なぜなら夢の中では肉体の変化には影響されることはないけれど、夢の中では夢の中の経験が変化を与えるから、これもアートマンではない、と思ったのです。それでプラジャパティのところに行き、そのように言うと、プラジャパティは、また32年間自分のもとで修業してください、と言いました。

32年後にインドラが尋ねると、プラジャパティは答えました。深い眠りの中にあるものがアートマンであると。なぜなら、深い眠りの中では、肉体や夢の中の体も影響されないからです。しかし深い眠りの中では、アートマンの知識もなければ、世界の知識もなく、ただ眠っている人は、無意識であるにすぎません。それで、そのような知識に何の益があるか、と考えました。それでプラジャパティのところに戻ってそのように言うと、プラジャパティは言いました。それでは、もう5年間自分のもとで修業してくださいと。それでインドラはアートマンの知識を得るために、101年間修業したといわれています。最終的にプラジャパティがどのような答えをしたかは、協会から出ているウパニシャドの本に書いてありますので、読んでください。（笑い）

この話が言わんとしていることは、アートマンの知識を得ようとすれば、ブラフマチャーリとして修業をしなければならない、ということ。そして悟った人と一緒に過ごさなければならない、ということです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、「それぞれの魂は本来神聖である。人生の目的は、その神聖さをあらわすために、外的また内的制御によって、それをあらわさなければならない」と言っています。ブラフマチャーリの修業というのは、つまり肉体と心の制御をすることです。ラージャ・ヨーガでは、ヤマやニヤマから始まって、肉体の制御を学び、そしてダーラナ、ディヤーナ、サマーディで心の制御を学びます。

次に必要なことは、悟った人との交わり、ホーリー・カンパニーの交わりを保つことです。シュリー・ラーマクリシュナが言っているように、脈の見方を学びたければ医者と一緒に過ごさなければならない、ということです。これは、いわゆる朱に交われば赤くなる、ということです。

この環境による影響力について考えてみたいことがあります。それはオオカミ少年や少女たちの例です。彼らは子供のときにオオカミや他の動物たちによって育てられたために、のちに発見されて人間社会に戻っても、人間になれなかったケースです。人間として成長する時期に、人間となる可能性へ導く通路がなかったために、人間となることができず、動物のままにとどまったケースです。これは子供のころに受ける影響がいかに大きな影響を及ぼすかが分かる例です。

この例は、さらにもう一つの興味深い可能性を示します。それは、もし人が神々の中で育ったらどうなるか、ということです。人間であることを超えて、神のようになるでしょうか？実際問題としては、私たちは神と会って交流することはできません。しかし私たちにとっては神を思うことが、神と交流することの代わりとなるといえるでしょう。なぜなら私たちの心は、この世界のことと、想像の世界のこと、夢の世界との違いを区別できないからです。ただ私たちが、これは現実世界であれは想像の世界である、と思っていることが違いを作っています。

スポーツの世界では、イメージトレーニングで効果があがることが知られています。医療の世界においても、ガンの病原菌と闘うことを想像することで、効果があがることが知られています。それゆえ、10年、20年と誠実に神を思っている人には、その表情や振る舞いに違いが出てきます。シュリー・ラーマクリシュナが言うように、神を瞑想する人は、神の性質を得るようになるのです。

私は日本に来る前に、ベルル・マトにしばらく滞在していました。ベルル・マトでは毎朝、プレジデント・マハーラージにプラナームをしに行きます。ある朝、プレジデント・マハーラージのいる建物に行くと、その近くに若者たちがいました。それで「今日はイニシエーションがあるのだな」と分かりました。イニシエーションの日はプラナームがないので私は帰りましたが、その時思いました。彼らはイニシエーションを受けることによって、その日から祈りや瞑想、ジャパなどをすることになります。それらの修業は心の静けさをもたらすものだから、日々の生活にも安定をもたらすのだろうと。そしてまた、イニシエーションを受けることによって他にどんなメリットがあるのだろうか、と考えました。彼らはグルを得るだけでなく、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、直弟子たちや出家僧との関係も深めることになります。このようなメリットを数え上げると、30近くにもなりました。私たちはイニシエーションを受けることによって、神との交流が始まるのだと分かります。

**ここまでのまとめ**

今まで述べたことをまとめると、第1に、ある人たちはこの世界の背後に神または霊の存在を感じたということ。そして人の中にも霊が宿っている、ということです。第2にリシたちによれば、その霊または神は普遍的で唯一の存在であるということです。第3として、その霊が何かを知るほど人は成長するということです。第4にその霊が何かを知るためには、私たちは、心と体の制御とホーリー・カンパニーが必要だということです。

**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージ**

最近の若者たちは、自分は無宗教だという人たちが増えました。まるでそれが何か進歩的であるかのように言いますが、しかし彼らは無宗教というよりは、無関心といった方がよいでしょう。犬や猫も宗教を信じていませんが、それが何か進歩的なことでしょうか？そのような人たちは、物質的な生き方をするしかないでしょう。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、人間社会から宗教を取り除いたら何が残るか？野獣たちの森だけである、と言っています。しかし、宗教を信じるか信じないかはそれほど大きな問題ではありません。人にとってもっと大きな問題は、自分が存在するかどうか、ということです。もちろん自分が存在していることには、誰も疑いを持たないでしょう。しかし自分が何か、自分の本性は何か、ということについては、彼らは全く知りません。自分が何かということを知らないで、自分は生きている、ということはできるでしょうか？自分は生きているけれども、自分は誰だか知らないというのはおかしな話です。誰が生きているというのでしょうか？もし自分が何か、ということを探求していくと、自分というものは見つからず、心の奥深くに私たちが神と呼んでいるような何か、を見つけだすでしょう。そして自分の中に神を見いだすとき、他の人々の中にも神が存在するということが分かります。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは言っています。全ての人間の体という神殿の中に神が座っているのを悟るとき、敬いをもって全ての人の前に立ち、彼の中に神を見るとき、その時私は束縛より自由となる。全てが神となったとき、神は全てであり、全ては私である。そのとき魂は浄くなる。その時にのみ、愛とは何かを理解すると。私たちが見なければならない神は、空のはるかかなたにいる神ではなく、私たちの中にいる神です。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはこうも言っています。誰も何らかの宗教のために生まれたのではない。人は自分の魂の中に宗教を持っている。真の宗教は私たちの中の魂の目覚めからであると。

**自分と他人の中に神を見、敬い愛する社会（スワーミージーの将来像）にするために**

初めに述べたように、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの思い描いた未来の社会の人々の姿は、今まで述べてきたことから理解できると思います。それは自分の中に神を見、そして他の人の中にも神を見、敬い愛する社会です。そしてそのような理想社会の姿は、未来に作られるだろうというものではなく、実を言えば、昔からすでに存在していたものです。リシたちが最高の真理を悟ったとき、当然そのような社会を自分の周りに小さいながらも形成していたでしょう。同じようにいつの時代にも悟った人たちの周りには、理想の社会が小さいながらも形成されていました。当然ながら私たちもそのような社会を作ることができることを示しています。

そのような社会を作るために必要となるものは、私たちが自分の本性をどこまで悟れるか、そして他の中の神をどこまで見ることができるかにかかっています。

**おわりに**

今日はスワーミージーの生誕祭で、私たちはこの機会にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの人生や教えについて考えることができます。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの教えは、全ての人々に向けられた普遍的な教えであって、何らかの小さな宗教や、教義ドグマを説くためのものではありません。彼は、人の本性は神であることを教えるだけです。私たちはこのような機会を持つことによって自分の本性が何か、ということを聞き、自分の人生をもっと良いものにできると思います。そしてそのために努力をするようになるでしょう。皆さんがそのような努力をされることを願って、私はこの話を終わります。